

有情物の存在に対する事態把握について*

閩南師範大学 洪安瀾

1. はじめに

主観・客観的な把握 (Langacker1990, 沈家煊 2001, 池上 2011, 2015 など) に関する諸研究を踏まえて、本研究はアンケート調査の結果に基づき、日中両言語の視点設定の「好み」を考察した。これまでの考察 (洪 2022) で明らかになったことであるが、無情物の存在を紹介する際、一般に中国語母語話者が視点を「水平移動」させ、余所から近辺へと近づくように出来事を紹介するのに対して、日本語母語話者がズームインするように、視点を「垂直移動」させ、腰をかがめたり、手に取ったりして観察するのが基本である。本稿では、有情物の存在を紹介する際 (特に第三人称の場合)、日中両言語が出来事をどのように描写するのか、「水平・垂直移動」の違いがあるのかについて考察する。

2. 先行研究及び問題点

2.1 視点と事態把握

視点 (View point/ Perspective) に関する研究では、視点は観点を含む広義の意味で言及されることが多い (辻 2013:150)。辞書でも「視点」が「視線が注がれるところ」と「事物を見たり考えたりする立場、観点、」という二つの意味がある。そのほかにも“視点(視点)” “视角(視座)” “焦点(焦点)” “視野(視界)”などの混乱しやすい類語も存在する。ここでは、視点に係わる諸研究を整理する。

I. 観察者の在り処 (観察者自身) を視点にする研究 :

方经民 (1987,1999,2002) の“观察点/心理视点”、“客视/主视”

申小龙 (1988) の“焦点视语言/散点视语言”

Langacker (2013)、Talmy (2017)、宗守云 (2021) 的“视角位置 (View point) ”

II. 当事者の立場に視点を置く研究 (当事者と物語全体との関係) :

大江三郎 (1975) の「視線の軸」

久野 暉 (1978) の「カメラ・アングル、共感(Empathy)度」

前田彰一 (1996) の「背後からの視点、ともにある視点、内側から視の点」

熊 沐清 (2001)、唐 淑华 (2021) の“观念视点、时空视点、叙述视点、知觉视点”

III. 観察者の视角をメンにする研究 (観察者と観察対象との関係):

森田良行 (1998) の「自分を取り巻く対象把握/自己を離れて世の中を把握する」

* 福建省社会科学基金基础研究项目中青年项目
《基于定量分析的汉日空间识解范式比较研究》(FJ2022C033)

- 甘露統子 (2004,2005) の「語り視点/報告視点」
- 金谷武洋 (2004,2012) の「神の視点/虫の視点」
- 彭 广陆 (2008,2016,2022) の“视点移动型语言/视点固定型语言”
- 上田 裕 (2016) の「傍観者俯瞰型視点/当事者現場立脚型視点」

IV. 焦点、着眼点に関する研究 (参照物と観察対象との関係):

高橋 弥守彦 (2017,2020) の「話題視点/事実視点」

なお、本稿でいう視点は観察者の心理視点であり、場合によって当事者又は話者の立場である。客観・主観的な把握の説は、どの言語の話者であっても、一つの事態をいくつかの違ったスタンスで把握できるという観点を支持している。つまり、図1で示すように、視点は一ヶ所に留まらず、移動できるということが分かった。便宜上、方経民 (1987) にならない、本稿では客観的な事態を把握する事態外視点を“客視 (客視)”に、主観的な事態を把握する事態内視点を“主視 (主視)”に言い換える。

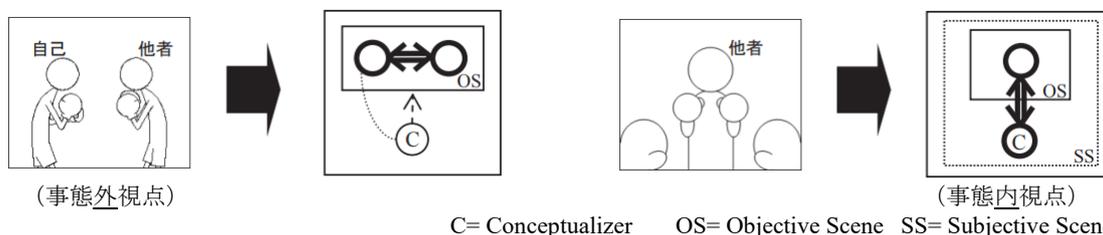


図1 町田章 (2012:246) による事態把握の様式

2.2 空間指示枠と参照物

ものの空位置を説明する空間指示枠(Relative FoR)は、視点 (viewpoint)、参照物 (ground/relatum)、観察対象 (figure/referent) から構成される (辻 2013:77)。

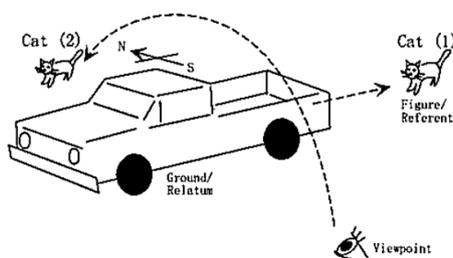


図2 辻 (2013:77) 内在的・相対的・絶対的指示枠の事例

参照物はさらに“自身参照”“整体参照”“外物参照”(本稿では「自己参照」「全体参照」「他者参照」と訳す)のパターンに分かれる(方経民 1987, 2004)。観察者(視点)が観察対象の位置を紹介する際、常に既知の参照物から説明を展開するが、参照物が暗黙知とされ、それを意味する名詞句が文中にこない(例えば例 1e、無標)場合が多く見受けられる。例えば、下記の画像を提示し、注射器の位置を説明してもらおうとすると、以下のよう4種類の「構図」が考えられる。



図3 お医者さんと注射器

- (1) a. 针筒在 我的右边。→主視＋自己参照
- b. 针筒在画面的右边。→主視＋全体参照
- c. 针筒在医生的右边。→主視＋他者参照
- e. 针筒在 右边。→主視＋自己参照／主視＋全体参照／主視＋他者参照
- e'. 右边 是针筒。→主視＋全体参照
- d. 针筒在医生的左边。→客視＋自己参照

(作例)

例(1a)から例(1d)の例文では、無標の例(1e)を除いて、事態把握の客観性が徐々に上がる。例(1d)のように観察者の立場がなくなり、参照物の方に移動したパターンは、本稿では「投射」と呼ぶ。(反対に、話者が事態内にいながら、外部に視点を移動させる場合は「抽出」と呼ぶ。)

次の節からアンケート調査で集めたサンプルを例に、日中両言語の母語話者が上記の構図のどちらを好んで使うのか、そして事態に対する知悉度は表現にどう影響しているのかについて考察する。

3. サンプルの分析

3.1 被験者情報について

には、中国語話者 142 名、日本語話者 116 名、延べ 258 名がアンケート調査参加した。被験者の情報は下記の通りである。

表 1 被験者のご出身 (人数多い順)

中国語話者：	华南、东北、西南、华中、华东、西北、华北
日本語話者：	関東、関西、中部、中国、東北、九州

表 2 被験者の性別

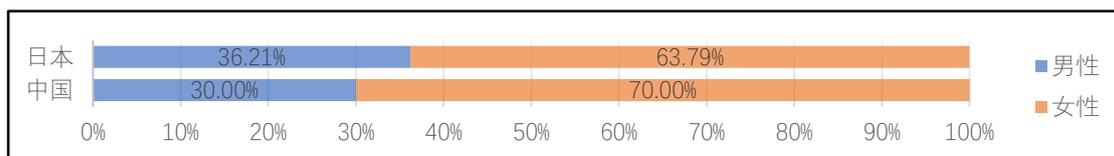


表 3 右利き/左利き

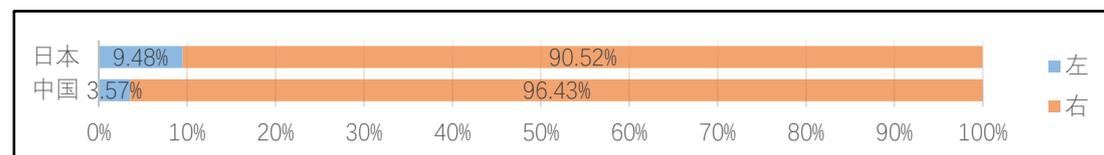


表 4 被験者の最終学歴

	小学校	中学校	高校など	専門学校	大学	大学院	図式
中国	0.00%	23.28%	6.90%	0.00%	67.24%	2.59%	--- ■
日本	0.00%	0.71%	8.57%	1.43%	72.86%	16.43%	--- ■

表5 被験者の年齢

	15歳以下	16-18歳	19-23歳	24-30歳	31歳以上	図式
中国	0.71%	13.57%	57.86%	18.57%	9.29%	— ■ — ■ —
日本	23.28%	1.72%	50.86%	0.86%	23.28%	■ — ■ — ■

3.2 問題設定と集計について

今回のアンケートには8枚の図を提示し、内容を説明するようにした。(現段階では、8問のうち代表的な2問を分析した。) それぞれの画像を説明する前に、被験者の内容に対する知悉度も調査した。



図4 問1_首脳会談



図5 問2_ハリー・ポッター

表6 知悉度に関する調査

		集計に 使える 例	回答			
			さっぱり分 からない	見覚えがあ るよ うな、ないよ うな	見覚えがあ る	よく知っ ている
中 国	問1	129	97 (75.2%)	24 (18.6%)	5	3
	問2	129	2	5	23 (17.8%)	99 (76.7%)
日 本	問1	107	73 (68.2%)	26 (24.3%)	8	0
	問2	108	1	1	29 (26.9%)	77 (71.3%)

よって、問1は未知な事態であり、問2は既知の事態であると言ってよからう。

3.3 考察項目

序号	例句	空間描述=1 動詞描述空間 =2	主視=1 客視=2 不明=3	自身参照=1 整体参照=2 外物参照=3 不明=4	方位域=1 地点域=2	平視=1 俯視=2 无視点=0	射体-地标=1 图-地=2	順序
1	ルーラは左、ソクラテスは真ん中、パローゾは右。	1	1	2	1	1	2	左中右
2	真ん中にいる人がソクラテス、右側にいる人がパローゾ、左側にいる人がルーラです。3人が固く握手をしており、笑みを浮かべています。	1	1	2'	1	1	2	中右左
5	写真左に写っているルーラ、写真中央に写っているソクラテス、写真右に写っているパローゾの3人が笑顔で握手をしている。	1	1	2	1	1	2	左中右
6	前に3人いてにこやかに手を握り仲が良さそう。これからの関係も良好そうだ。	1	1	2	1	1	2	前後
7	その右に欧州委員会委員ブラジル大統領ルーラ氏が写っている。	1	1	23	1	1	12	中右左
9	中央はポルトガル首相のソクラテスです。3人は握手をしなが	1	1	2'	1	1	2	左中右
10	ブラジル大統領が真ん中、欧州委員長が左、ポルトガル首相が右に写っています。3人がお互いに握手をしてい	1	1	2	1	1	2	左中右

図6 集めた例文と考察する項目 (集計作業の画面)

今回メインに考察するのは以下の3項目である。

- a. 位置関係の説明し方 (空間詞か、動詞か)
- b. 参照系の選び方 (自己・全体・他者参照)
- c. 視点設定 (主視か、客視か)

位置関係の説明し方で、例(2a)(2b)は空間詞(空間名詞)を用いて位置関係を紹介した例で、例(2c)は動詞「並んでいて」で人物の位置関係を紹介した例である。例(2d)は空間詞と動詞と両方を使って場面を描写している。

参照系の選び方では、以下の4例はいずれも「(画像の)全体参照」の参照系を選んだが、例(2b)の分文は無標のため、「(画像・ソクラテスの)右側にいる人がバローゾ…」のように二通りに解釈できるので、「全体参照に振り分けて最もよいだろう」という意味で、集計する際に「」を付けた。

- (2)a. ルーラは左、ソクラテスは真ん中、バローゾは右。(JP-Q1:1)
- b. 真ん中にいる人がソクラテス、右側にいる人がバローゾ、左側にいる人がルーラです。3人が固く握手をしており、笑みを浮かべています。(JP-Q1:2)
- c. ルーラ、ソクラテス、バローゾが並んでいて、手を繋いでニコニコしてる。(JP-Q1:57)
- d. 左からブラジル大統領、ポルトガル首相、欧州委員会委員長が並び、握手をしている。(JP-Q1:61)

以上の4例はいずれも「主視+全体参照」の構図を採用したが、以下の例では視点の移動が起きた。「写真中央」は「主視+全体参照」の構図であるが、「ソクラテスから見て右手側にはルーラが、左手側にはバローゾが…」は「客視+自己参照」なので、視点を「ソクラテス」の方に投射したということである。よって、日本語母語話者は無情物と共感できないが(これまでの結論)、有情物と共感して、視点を移動させることができることも分かった。

- (3) 写真中央のソクラテスから見て右手側にはルーラが、左手側にはバローゾがおり、3人ともカメラに向かって笑顔で握手を交わしている。(JP-Q1:73)

序号	例句	空間描述=1 動詞描述空間 =2	主視=1 客視=2 不明=3	自身参照=1 整体参照=2 外物参照=3 不明=4	方位域=1 地点域=2	平視=1 俯視=2 无视点=0	射体・地标=1 圖地=2	順序	其他
73	写真中央のソクラテスから見て右手側にはルーラが、左手側にはバローゾがおり、3人ともカメラに向かって笑顔で握手を交わしている。	12	12	12	1	1	12	中右左	投射

図7 「投射」の例

4. おわりに

今回の研究はなお不十分で、まだ結論に至らず、現段階の集計の結果だけを報告する。

表7 問1の位置関係(未知)を説明したサンプルを集計した結果

問1	位置関係の説明し方	優位を占める構図 (重複する部分がある)	構図変化
中国 (96例)	空間詞: 84 (87.5%) 動詞: 2 (2.1%) 両方: 10 (10.4%)	主視+自己 ^{参照} : 0 主視+全体 ^{参照} : 88 (91.67%) 主視+他者 ^{参照} : 12 (12.5%) 客視+自己 ^{参照} : 3 (投射) (3.1%)	主視+全体 ^{参照} > 主視+他者 ^{参照} : 5 (5.3%) 主視+全体 ^{参照} > 客視+自己 ^{参照} : 3 (3.1%)
日本 (56例)	空間名詞: 34 (60.7%) 動詞: 4 (7.1%) 両方: 18 (32.1%)	主視+自己 ^{参照} : 0 主視+全体 ^{参照} : 54 (96.4%) 主視+他者 ^{参照} : 3 (5.4%) 客視+自己 ^{参照} : 1 (投射) (1.8%)	主視+全体 ^{参照} > 主視+他者 ^{参照} : 2 (3.6%) 主視+全体 ^{参照} > 客視+自己 ^{参照} : 1 (1.8%)

表8 問2の位置関係(既知)を説明したサンプルを集計した結果

問2	位置関係の説明し方	優位を占める構図 (重複する部分がある)	構図変化
中国 (108例)	空間詞: 81 (75.0%) 動詞: 9 (8.3%) 両方: 18 (16.7%)	主視+自己 ^{参照} : 0 主視+全体 ^{参照} : 99 (91.7%) 主視+他者 ^{参照} : 14 (13.0%) 客視+自己 ^{参照} : 7 (投射) (6.5%)	主視+全体 ^{参照} > 主視+他者 ^{参照} : 7 (6.5%) 主視+全体 ^{参照} > 客視+自己 ^{参照} : 5 (4.6%)
日本 (82例)	空間名詞: 19 (23.2%) 動詞: 12 (14.6%) 両方: 51 (62.2%)	主視+自己 ^{参照} : 0 主視+全体 ^{参照} : 82 (100%) 主視+他者 ^{参照} : 10 (12.2%) 客視+自己 ^{参照} : 0 (投射)	主視+全体 ^{参照} > 主視+他者 ^{参照} : 10 (12.2%)

表9 「未知」と「既知」との違い

中国語	<ol style="list-style-type: none"> 1) 位置関係を報告するサンプルがやや増えた (96例→108例) 2) 位置報告に空間詞を用いる割合がほぼ変わらない (9割) 3) 位置報告に動詞を用いる割合が増えた (12.5%→25%) 4) 構図はほぼ変わらない 5) 視点を投射(共感)する割合が増えた (3.1%→6.5%) 6) 参照物及び視点を変える割合がやや増えた
日本語	<ol style="list-style-type: none"> 1) 位置関係を報告するサンプルが増えた (56例→82例) 2) 位置報告に空間詞を用いる割合がほぼ変わらない (9割) 3) 位置報告に動詞を用いる割合が明らかに増えた 39.2%→76.8% 4) 優位を占める構図は変わらないが、「主視+他者^{参照}」の構図の使用頻度が増えた (5.4%→12.2%) 5) 視点の移動はほとんど見受けられない (1例だけ) 6) 参照物変える割合が増えた (3.6%→12.2%)

今回のご発表は以上で終わらせていただきます
ご清聴ありがとうございました